

愛媛県南予地域における津波の被害・浸水域・高さとの地名の関連 ～津波防災に対する地名の有効性の考察～

上村 勇輔* (愛媛大学理学部)

§ 1. はじめに

著者*は津波と沿岸部に存在する地名との関連について調査している。本誌第 35 号 (2020) においては、静岡県伊豆半島沿岸部において、津波に由来を持つ地名や津波に関連する地名があることを報告した [上村・荒井 (2020)]。本研究は、上村・荒井 (2020) と継続研究としての性格を持たせつつ、愛媛県においておこなっているものである。昨年の高槻大会においては、上村・亀山 (2022) として、愛媛県南予地域の沿岸部に存在する寺院と小学校に対して行った津波に関連する地名の有無や津波に関する伝承の郵送調査の結果を報告した。本大会では、昨年度に継続し郵送調査による結果について、地名の由来やその地の伝承の真偽や確からしさについて調査・検討した結果を報告する。

§ 2. 津波防災と地名

将来の地震・津波による災害へ備える上で、過去の地震・津波の状況や被害を知っておくことは大変に有用である。過去の記録を知るにあたっては、古文書に代表される歴史資料に触れることが必要になるが、残念ながらその多くは難解で、一般市民が活用するには非常に困難である。一方、市民に直接災害に対する警鐘を鳴らしうる史料として、津波碑などの金石文があるが、市民の目に触れる機会は多くても、その内容が認知されていないことや、風化や書体、文体の違いによる解読の難しさが課題となっている。

そこで本研究では、地名に着目し、これを史料として活用することを提案している。地名は、誤った解釈や発音・表記の変化といった弱点があるものの、市民が日常的に目にするのできる身近な史料であるだけでなく、内包されているその土地の風土や自然現象、歴史や伝説を読み取れる可能性を有すると考えられるからである。

過去の津波の被害や波高、浸水域と比較して、津波との関連が少なからずある地名の存在は以前より指摘されている。例えば上村・荒井 (2020) は静岡県伊豆半島において、宝永地震津波および安政東海地震津波、元禄関東地震津波の被害、波高および浸水域と津波に由来するとされる地名を比較紹介している。上村・荒井 (2020) の研究はあくまで静岡県伊豆半島においてであるが、やはり過去に少なからず津波の被害を経験した愛媛県沿岸部にも同様の由来を持つ地名が存在する可能性は十分にあると予

想される。ある程度の数の地名が津波に関連しており、地名が防災や減災に有効であり得ることが実証できれば、この研究によって市民の防災意識の一層の醸成につながると考えている。

§ 3. 郵送調査により判明した南予における津波に関連する地名・伝承

2022 年に行った郵送調査によって、伊方町田部地区に津波に関連する由来を持つ地名である「木船神社」と、伊方町河内地区に津波に関連する伝承があると判明した。筆者は特にこの 2 つの地区において、由来・伝承の真偽の確認を行った。

津波に由来すると郵送調査で情報提供があった「木船神社」は、伊方町田部 (たぶ) 地区に存在するもので、郵送調査において「昔津波の時にその神社跡まで船が流されてきた」ことがその名前の由来であると回答があった。現地調査によって、「木船神社」は現在、集落中央の客神社の境内へ移されており、元の神社の場所には何もないことが確認された。また、元の木船神社の境内は標高約 40 メートルの場所にあり、正式な表記は「貴船神社」であることが判明した。さらに、追加で行った文献調査において、瀬戸町誌に木船神社の由来の記載があることが判明したが、これによれば、「木船」とは 1780 年ごろの台風による大しけによって小舟が神社の付近に打ち上げられたことに由来しており、津波によるものであるとの記載はなかった。

津波に関連する伝承が残る伊方町河内地区には、津波に由来する小地名が存在することが、東北大学の今井健太郎氏からの情報提供で判明した。「になみ」「さんなみ」というもので、伊方町誌にも河内地区の「三浪」が「伝説などから生まれてきたのではないかと思われる」地名として挙げられており、今井氏の「さんなみ」と伊方町誌の「三浪」は同じものを指すと考えられる。河内地区内のどの場所を指して「になみ」「さんなみ」というのかについては調査中であるが、筆者は、このように類似の証言・記録が複数の筋から得られたことから、河内地区まで何らかの津波が過去に到達したという事象は十分に考えられ、これらの地名がその痕跡に当たるものと考えている。

本研究の一部は、国立大学法人愛媛大学の「愛媛大学学生による調査・研究プロジェクト (プロジェクト E) ジュニア部門」の採択を受けて実施した。